

荒縄工房

妹は 鬼畜系

あんぷらぐ

S
M
小説

妹は

鬼畜系

あんぷらぐ著

荒縄工房・発行





本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐ

S M雑誌に「仲ゆうじ」名でS M小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でS M小説を執筆。二〇一九年「あんぷらぐ」に改名。独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

| | |
|----------|-------|
| 無限射精の刑 | 8 |
| 男の娘の刑 | 2 6 |
| 市中引き回しの刑 | 5 2 |
| 拷問観覧の刑 | 8 8 |
| 輪姦の刑 | 1 1 1 |
| お尻狩りの刑 | 1 5 4 |
| 飲尿地獄の刑 | 1 7 4 |
| 性器いじめの刑 | 1 9 9 |
| 性器拡大の刑 | 2 1 3 |
| フイストの刑 | 2 2 6 |
| カンチョーの刑 | 2 4 2 |

| | |
|--------|-----|
| ピアスの刑 | 262 |
| 拷問志願の刑 | 280 |
| 潰し刑 | 297 |
| 改造の刑 | 343 |
| 女責めの刑 | 360 |
| 電マ地獄の刑 | 379 |
| しごきの刑 | 394 |
| 快樂責めの刑 | 419 |
| 油地獄の刑 | 435 |
| ギロチン刑 | 450 |
| 晒し者の刑 | 472 |
| 奥付 | 483 |

無限射精の刑

鍵がガチャガチャと音を立てて、薄いドアがバタンと開きました。

「おにいちゃん、生きてた？ どうだった、無限射精の刑！」

妹の元気な声です。

ぼくは返事ができませんし、見ることもできません。昨日の夜、手足を、ガムテープや荷造り用のビニールヒモで縛られ、目隠しをされ、ガムテープで猿ぐつわをされたまま放置されていたのです。

「あーあ、いっぱい出しちゃって。汚いなあ」

足を閉じてぐるぐる巻きに縛られて、そこに家庭用の電源で動く大型マッサージ機がくくりつけられていたのです。その先端はぼくの玉と竿を一晩中、刺激し続けていました。

その刺激に慣れることはありません。麻痺したと思っただらしばらくしてさらに敏感になる瞬間があつて、ろくに固く立ってもいないのに、何度も何度も射精しまくっていたのです。

眠ることなどできません。

身もだえしながら、ひたすら妹が助けに戻ってくることを祈っていたのです。

「ひとり暮らしになったから、毎日、たっぷり楽しめ

「ていいね」

けっこう年下。父の再婚相手の連れ子で、しかもアイドルのようにカワイイ。

ですが、妹は鬼畜なんです。

昨日、引っ越しのあと、妹はぼくにこう宣言しました。

「いよいよ、計画実行だね。おにいちやんはボロボロになるまで、あたしが面倒みてあげる。うれしい？

うれしいよね？　うれしいでしょ？」

返事などできません。

「よかったね、ホントに」

ドカドカと土足で上がってきます。

ドンと腹部を蹴られます。

「んぐぐぐ」

「元気じゃん。さっすが、おにいちゃん。体力だけはあるわ。これぐらい平気なのね。すっごい、いじめ甲斐があつてステキ」

アイマスクをずらしてくれました。

ああ、天使のような妹、ケイ。いや、ケイ様。

「こういうのは、最初にバシツとやらないとダメなのよ」

つやつやとした肌。くりくりとした目。無邪気な笑顔。抱きしめてキスしたくなる唇。天使そのものです。「夢がかなったって感じ？　だよね！　おにいちゃん

が大好きな変態の本だと、朝はやっぱり喉をうるおすところから始まるわけよね？」

猿ぐつわのタオルをようやく外してくれます。その下のガムテープをビリッと剥がします。顔の皮が剥けるのではないかと思うほど痛いのです。

「ゲホゲホ」とむせながら、口の中にはいつていた自分のパンツを吐き出します。

「ほら、お口を大きく開けて」

ぼくはまさかと思いつつ、口を開きます。

妹がぼくの上にまたがりました。フリフリのピンクのミニスカート。その下のクマの絵がついた水色のパンツをずりさげます。

無毛の股間を押しつけてきます。

「ほらほら。くださいって言つてよ」

やわらかな妹の陰部が口の中にあつて、言葉になりませんが、「ください」と言います。

「じゃあ、あげる。絶対にこぼすなよ！」

言い終わらないうちに、勢いよくオシッコが口の中へ。

必死でそれを飲み込みます。でも、間に合わず、少しはあふれて顔を伝つていきます。

なんて甘いんだ、なんて香りなんだ。これぞ聖水。ケイの甘酸っぱい体液。

腫れて痛いぼくの股間がまた固くなっていました。

コンセントに刺さっている電動マッサージ機は、間断なく振動を続けています。ああ、この無限射精の刑は辛い……。でもうれしい。

「ねえ、おにいちやんで、黄金、食べられる？ お腹すいてるでしょ。黄金食べたら元気になるよね？」

まさか。

これほど妹が奔放だとは思いませんでした。同じ屋根の下で暮らしていたときは、おしとやかで、奥手のフリをしていたのに。なんにも知らないような無邪気さで、日曜日の早朝のアニメに夢中になっていて、ぼくが買ってあげたアニメのヒロインが使うグッズを素直に喜んでいたあの妹なのです。

ケイはその時すでに、ぼくが隠し持っていたさまざ
まな変態を題材にしたマンガや小説や同人誌を、すべ
てこっそり読んでいたんです。

それだけじゃなくて、ぼくのパソコンのブログも読
んでいて、そこに匿名で思い切り書いていた妄想もし
っかり読んでいたみたいです。

だから、妹を鬼畜にしたのは、ぼくなんです。

「はい。ください。いただきます、ケイ様」

ぼくは小さな声で答えました。もう感じまくってい
て、全身がガクガクとなっっています。

「よしよし。今朝、しないで来たの。ずっとがまんし
ていたから」

「あ、ありがとうございます」

「お食べ」

見ることはできません。妹はお尻をぼくの口につけて、頭ごとすっぽりスカートで覆ってしまいました。

薄暗い中で、口の中に異臭が漂い、やがて固形物が落ちてきました。

「よく噛んで食べるのよ」

マンガや小説に書いてあったセリフを、妹はしっかりとマスターしているのです。

ぼくは夢中で飲み込みます。噛んでいる暇はありません。小さな体のくせに、その量は驚くほどで、飲み込んでも飲み込んでも追加されてきます。

その間に、ぼくは完全に達してしまい、何十回目かの射精をしました。いえ、精液なんて出ていないと思います。震えながらすべてを飲み込みました。必死に。いえ、死んでもいい、このまま死のうと思いつながら。

ぼくのような変態はここで死んでしまったほうが世の中のためですから。いや、そうすると、妹に面倒なことが起こるかもしれない。それは可哀想。だけど、もう死にます。死んでよし……。

「はああああ」

思わず声をあげていました。

妙な味が口の中に残っていました。

はじめてなのに、できたのです。聖水と黄金といえ
ば、通常、女王様とよほどの関係がなければいただけ
ないものです。それを、ケイはいきなり、おしげもな
く。

感動でした。震えが止まりません。

「舐めて、きれいにして」

夢にまで見た、妹のアナル舐め。小さな蕾に舌を伸
ばします。見えませんが、そこにあるのはわかってい
るのです。

舌先だけで感じ取ります。

なんて柔らかかで、小さいのでしよう。舌の先にほん
の少し窪んだ穴として感じます。あれだけのものを出

したとは思えないほど、慎ましいのです。

鼻にはオシッコをした部分がくっついていて、そこからなにか別の液体が流れているのがわかります。そこも舐めたいのですが……。

「おいしかったですか？」

「ありがとうございます。大変、おいしかったです」

妹はさつと立ち上がり、トイレに行きました。

戻ってくると、「けっこう、気持ち悪いね」と軽蔑したような目で見下ろします。

「変態はやっぱ、気持ち悪いし、なんか大変だわ」
ここで飽きられたら困るのはぼくです。生き延びて

しまったので、これから先、どうやって生きていけばいいのでしょうか。

「今日は日曜日なんだよ。ひとり暮らしの最初の日だからさ、見たいアニメも見ないで飛んできてやったんだよ。せつかくだから思う存分、いじめたいんだけど、いい？ いいよね？」

「はい。お願いします」

「そこは『いいとも！』だろ！」

平手で頬を叩かれます。

「ひっ、すみません」

あまりにも古いので、忘れておりました。妹はネット動画でコントなどを見るのが好きなので、古いお約

束も知っているようです。

「じゃあ、一度、解くけど。変なことしないでよ。このしないですよ、はお約束の『本当はしてよ』の意味じゃないからね。わかるよね？」

「はい、もちろんです」

後ろ手にされていたガムテープが乱暴にちぎられました。

「いててっ！」

「あとは自分でやって」

ガムテープを剥がすたびに激痛が走ります。

やっと足が自由になり、股間の電マもはずしました。チンチンがふにやふにやで、もともとそれほど大きく

ないのですが、すつごく小さくなっています。もう、ぼくをいじめないで、と言っているようです。

「バッチイ！ 汚ちやないから、ちゃんと洗ってきてよね。掃除もしといて。変な病気がうつらないようにしつかりね。あたし、コンビニ行ってくるから」

「はい」

妹は出かけていきました。

掃除のことなどで念押しするケイは、母親にそっくりで、それもまたゾクゾクしてしまいました。あの鬼のような母は、ぼくの妄想の源泉ですが、だからといっていまこの状態で会いたいわけではありません。

だって、妹がいる！ なんでもしてくれる最高の変

態の友、ケイ様がいる！

これ以上、なにが必要でしょうか。神様仏様、この変態にこのような幸運を与えてくださり、ありがとうございます。ございます。ぼくは一生、しもべです。この世の地獄に突き落としてください！

四畳半一間の小さな部屋です。

ユニット式のバストイレと流し台があります。ベッドと勉強机を運んでありますが、放り出したままです。ちゃんとセッティングされていません。

業者が帰ったあと、いきなり妹に縛られて無限射精の刑に処されてしまったからです。

だるくて、そこらじゅうが痛い体をなんとか立ち上

げました。下半身は自分の体じゃないような感じでした。床を掃除し、体を拭き、口をゆすぎ、顔を洗いました。

口の中にしつかり妹の味が残っています。あときは疲れ切り、感じまくり、ぼんやりとした中で夢中に飲み込んでしまったのですが、うっすら残る余韻に、とんでもないことをしてしまったという気持ちがかこみあげてきました。

食糞……。

とうとう、そんなことをする男になってしまったのです。もう一度やれと言われても、たぶん、できそうにありません。

だけど、きつとケイ様は、ぼくに強いるでしょう。変態はそう扱うべきだと思っっているからですし、ぼくもそれを訂正する気はないのです。

お願いです、そのまま一生、鬼畜な妹として成長してください。おにいちちゃんは、死ぬまでお仕えいたしますから。

奥付

お読みいただきありがとうございますございました。

二〇一二年十二月初版 二〇二〇年四月二版

著作権 あんぷらぐど (荒縄工房)

荒縄工房の情報は下記サイトへ

● [ブログ「荒縄工房」](#)

● [ホームページ](#)

● [荒縄工房 S M 研究室](#)

● [今日も上機嫌ってわけないだろ](#)

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。